

情報通信審議会 情報通信技術分科会 技術戦略委員会
革新的情報通信技術プロジェクトワーキンググループ
(第4回) 議事要旨 (案)

1 日時 令和6年2月6日(火) 8時00分～9時24分

2 場所 ウェブ開催

3 出席者

①構成員

森川 博之(主任)、木村 亮示、杉浦 孝明、立本 博文、平田 貞代

②オブザーバー

新田 隆夫(国立研究開発法人 情報通信研究機構 理事)

③総務省

(国際戦略局)

豊嶋 基暢(官房審議官)

川野 真稔(技術政策課長)

中越 一影(通信規格課長)

影井 敬義(通信規格課 標準化戦略室長)

石田 紀之(通信規格課 標準化戦略室 課長補佐)

4 議題

(1) 革新的情報通信技術(Beyond 5G(6G))基金事業による国際標準化活動に対する支援の在り方について

(2) その他

開 会

○森川主任 皆様、おはようございます。朝早くからありがとうございます。

これから、情報通信技術分科会の技術戦略委員会革新的情報通信技術プロジェクトのWG、こちらの第4回を開催いたします。ありがとうございます。

それでは、最初に、事務局から本日の配付資料の確認と、あと本日のWGのウェブ会議に伴う補足説明、こちらをお願いできますか。

○石田課長補佐 事務局の総務省通信規格課標準化戦略室でございます。

まず、本日の配付資料については、議事次第に記載されておりますとおり、資料4-1から4-4参考資料4-1、4-2の計6点となっております。

続きまして、本日のWGのウェブ会議に伴う補足説明を行います。会議の円滑な進行のため、構成員及びオブザーバーの皆様におかれましては、御発言の際には、画面上の挙手ボタンを押下いただき、御発言希望の旨を表明していただければと存じます。また、お名前を冒頭に言及し、可能であればビデオをオンにしてください。御発言のとき以外は、マイクとビデオはミュート、オフにしてください。音声の不調の際は、チャット機能を御利用ください。

また、本日の出欠状況でございますが、長内構成員が御欠席の見込みでございます。

ウェブ会議場に資料を投影いたしますが、表示が遅れることもございますので、事前送付した資料もお手元で併せて御覧ください。

事務局からは以上です。

○森川主任 ありがとうございます。

次に、本WGの運営について補足説明があるとのことですので、こちらも事務局からお願いできますか。

○石田課長補佐 事務局でございます。

お手元の参考資料4-1、革新的情報通信技術プロジェクトWGの運営についてを御覧ください。

本年1月19日に開催された第43回技術戦略委員会において、Beyond 5G基金事業による国際標準化活動支援の在り方について、本WGで検討を行うこととされました。これを受け、同委員会の相田主査による決定の下、本WGの運営について、2、主な調査内容に、(2)として、国際標準化活動に対する支援の在り方の検討について追記するとともに、8、事務局に、本検討を行うため総務省の関係課室も本WGの事務局機能を担

う旨の追記といった改定を本日付で行うこととしております。

事務局からは以上となります。

○森川主任　　ありがとうございます。

議　事

(1) 革新的情報通信技術（B e y o n d 5 G（6 G））基金事業による 国際標準化活動に対する支援の在り方について

○森川主任　　それでは、議事に入りたいと思います。

本日は、お手元の議事次第にありますとおり、国際標準化活動に対する支援の在り方に関して、皆様方にいろいろな意見を伺えればというふうに思っております。それとともに、本日、杉浦構成員、木村構成員、立本構成員からもプレゼンテーションいただきます。その後、まとめて意見交換というふうにしたいと思いますので、よろしく願いいたします。

それでは、まず、本WGを再び開催することとした背景とか経緯、そして本WGでの検討事項を含め、事務局から説明をお願いできますか。よろしく願いいたします。

○影井標準化戦略室長　　事務局、総務省標準化戦略室長の影井でございます。

本WGの構成員の皆様、オブザーバーの皆様、本当に朝からありがとうございます。

資料4-1に基づきまして、御説明したいと思います。

1 ページを御覧いただきまして、本WGでの検討の再開をいただく背景・経緯となります。B e y o n d 5 G基金事業に係るこれまでの状況を含めた御説明となります。

2 ページを御覧ください。

B e y o n d 5 G基金事業の概要となります。令和4年の12月に国会で成立しました改正法に基づきまして、N I C Tに恒久的な基金を造成しております。B e y o n d 5 Gの重点技術等について、民間企業や大学等への研究開発の支援をスタートしてきたというところでございます。

3 ページを御覧ください。

こちらが、この基金事業に係る主な状況とスケジュール、主にこれまでの振り返りとなりますが、この資料の線表の左側の記載を御覧いただきまして、約1年前に、本基金事業の立ち上げに当たりまして、事業面評価の在り方について本WGで御検討いただきまして、

昨年3月に取りまとめていただきました。それを踏まえて、総務省において基金運用方針を公表し、NICTが基金を造成しております。その後、本年度に入りまして、NICTにおいて基金の運営体制を確立し、また、評価体制も整備してまいりました。

こちらに記載のように、社会実装・海外展開志向型戦略プログラムの公募を2回行っております。それぞれにおきまして、予備調査と公募・審査を行っております。その際には、吹き出しのところにありますように、本WGの構成員の皆様に参加いただいたNICTの評価委員会におきまして、事業面からの予備調査のヒアリングですとか、また、採択に当たっては提案企業の経営層による事業戦略の説明を受けて事業面からの評価を実施いただいております。そうしたことで、本基金事業による研究開発プロジェクトの実施に係る各種手続が着実に進展してまいりました。

4ページへ進んでください。

本基金事業では、社会実装・海外展開に向けた戦略とコミットメントを持った研究開発を重点的に支援することとしております。これを社会実装・海外展開志向型戦略的プログラムと称しておりますが、その戦略プログラムの実施に当たりましては、こちらに記載のように、本WGで取りまとめていただきました事業面評価の項目、これが本資料に記載のものになりますが、これに基づきまして、グローバルな市場獲得や経営・ビジネスの観点で、標準化戦略を含めた事業面からの評価、採択評価は先ほどの資料のとおり既に実施していただいております。今後、モニタリングやステージゲート評価を実施していくこととなります。

続いて、5ページ御覧ください。

本基金事業による、社会実装・海外展開志向型戦略的プログラムにつきまして、今年度に公募・採択をしてきたプロジェクトや実施企業の状況がこちらとなります。2回目の公募対象案件に関しては今審査中という位置づけでございます。

6ページを御覧ください。

Beyond 5Gに関しましては、こちらの資料に記載のような、公的なデジュール標準ですとか、それから民間ベース、デファクトにも近いようなフォーラム標準を扱う標準化団体での検討や作業が、まさに本格化をしていく見込みでございます。これに対して、世界各国の主要企業が注力していくことが想定されます。

そうした状況の中で、7ページ進んでいただきまして、政府のほうではBeyond 5G基金に関して令和5年度の補正予算が新たに措置をされております。その中で、標準

化に着目していきますと、この基金の中に新規で標準化活動支援メニューというものを追加することになりました。具体的には、右下の赤字で書いておりますように、助成のスキームということで、社会実装・海外展開志向型戦略的プログラムに採択された実施者を対象とし、国際標準活動に必要な旅費や専門人材の人件費等を支援するというものでございますが、こちらについては、この下段の文章に記載しておりますように、基金事業の一環での取組ということになりますので、この基金事業の趣旨、これがやはり重要となっております。Beyond 5Gの標準化活動において、まさに国際標準の獲得につなげていくためには、この研究開発のプロジェクトにおける自らの投資ですとか事業戦略、経営コミットメント等を含む戦略と覚悟を持ったプロジェクトに対して、この戦略商材の社会実装・海外展開に向かって重要となる標準化活動、これを支援していくことが重要ということを基本的な考え方としています。

この考え方に基づきまして、先般1月19日の技術戦略委員会におきまして、この国際標準化活動支援メニューに関しては、その支援の在り方について、本基金事業の事業面評価をこれまで担っていただいた本WGでの検討を行うことが適当とされたところでございます。

ここまでを背景としまして、続いて8ページへ進んでいただきまして、ここからが本WGで具体的に御検討いただきたい中身のお話でございます。

9ページ御覧ください。

検討いただきたい事項ということで、リード文にありますように、令和5年度補正予算による本基金事業の標準化活動支援メニューに関しては、この基金による社会技術・海外展開志向型戦略的プログラム、戦略プログラムと略しまして、これに採択された研究開発プロジェクトの実施者による標準化活動を支援する経費ということで予算を計上しております。その支援対象となる案件に関しましては、そういったことから戦略プログラムのこれまでの採択プロセスにおいて、標準化戦略の観点を含む事業面評価を既に受けていただいた上での選定を経ているということも踏まえた形で、この基金による支援の実効性・効率性を確保する観点から、本WGにおいて、標準化活動支援に対する支援の在り方について御検討いただきたいというところでございます。

まず、この検討に当たって少し前提条件申し上げますと、資料には書いておりませんが、この標準化活動支援メニューの具体的な助成の規模ですとか助成率等の予算面では、鋭意、総務省において、予算事情等も踏まえて設計中の状況ですが、イメージとしましては、

大体2分の1助成を想定しまして、1プロジェクト当たり国費分で大体数千万から最大でも1億円ぐらいの規模感、こういったものを想定しております。

ですので、こういったイメージも御検討の参考にいただきまして、今回の検討事項ということで、3つ下段に書いておりますが、まず1つ目としましては、基金事業による標準化活動支援の対象決定に係るプロセスの在り方。2つ目に、そうしたプロセスの中で、標準化活動支援の対象決定のための審査を行うための要件、これを国際標準化活動支援要件と称していますが、この在り方。この2つが大きなポイントとなります。そして3つ目としましては、その他の論点がありましたら、それは拾いたいと考えているところでございます。

続いて、10ページを御覧ください。

この本WGでの当面のスケジュールとなります。NICTの基金に、令和5年度補正予算による拡充分をこれから積み増して運用していくということが必要となります。このために、3月には、総務省が定める、資料下段にも書いていますが、基金運用方針ですとか、この標準化活動支援を行うための支援要件、こういったものを確定させて、そして規定類の整備を終える必要がございます。こうしたことを念頭に置きまして、本日の会合も含めまして、短期間となりますけれども、3回ほどのWGを開催して御検討いただきたいと考えております。

その中でということで、この初回、本日については、一番上の段になりますけれども、検討事項としましては、検討事項に沿いまして、(1)で支援の対象決定に係るプロセスの在り方と。これはこの後、事務局説明に基づいて御討議をいただきたいものです。

次に検討事項(2)が、支援の対象決定のための審査の要件の在り方、ここに関しては事務局説明でお示ししたのイメージ、考え方とともに、杉浦構成員、木村構成員、立本構成員からも資料を御用意いただきまして、御発表いただきますので、それらに基づいた討議をお願いできればと思っております。最後(3)はその他ということになります。

次回以降に関して申し上げますと、2月の中下旬に2回目、3月の上中旬に3回目のWGの開催を想定しておりまして、先ほど申し上げたスケジュールに鑑みますと、次回にはある程度論点整理、またはWGの取りまとめ骨子案というようなことで、実質的な方向性を固めていきたいと思っております。そして、最終的には第3回でWG取りまとめをまとめていただきたいという考えでございます。

11ページ、御覧ください。

ここからは、先ほどの各検討事項ごとにパートに分けて議論をいただきたいと考えております。まず、これが1つ目の項目に関する主な視点でございます。

「1. 標準化活動支援の対象決定等に係るプロセスの在り方について」ということで、検討の視点としましては、1ポツ目の、今回の支援対象となる案件の決定等に関しては、標準化戦略の観点も含む事業評価を受けた上での選定を経ているということも踏まえまして、本基金事業による支援の実効性・効率性を確保したプロセスとすることが必要ではないかと。このため、戦略プログラムとは別に、一から、標準化支援に関して公募や評価・採択等のプロセスを行っていくということではなくて、執行機関が研究開発採択時の提案内容を踏まえまして、客観的な審査の要件に基づいて審査をして決定するプロセスとすることが適当ではないか、としています。また、そのプロセスにかかる透明性や客観性を確保する観点からは、支援要件の内容については、その在り方についてまさに本WGで検討を行っていただくということで、その上で総務省が策定・公表することが適当ではないか、こういったオープンなプロセスで定めていくことが必要ではないか、としております。

続いて、12ページを御覧ください。

検討事項の「2. 標準活動支援の対象決定のための審査の要件の在り方について」でございます。検討の視点の1点目が、戦略プログラムの採択時の提案書におきまして、当該プログラムの研究開発成果に係る標準化活動を行う取組、計画や対象となる標準化団体等が明確に記載されているということを前提とすべきではないか、としております。その際に、戦略プログラムの採択時の提案書に記載された国際標準化の取組、これ自体は、実施することを既に先の採択のプロセスの中でコミットした内容であることから、この取組自体を新たに支援するというのではなくて、この取組をより解像度を上げてといたしますか、より強化して拡充する、こういったことをして対応する標準化活動の内容であることを前提とすべきではないか、としております。そして、標準化活動支援に係る申請や審査に当たってという論点でございますが、これは先ほど来申し上げていますように、標準化戦略も含めて事業面評価をこれまで受けてきた上でのものだということを踏まえまして、それに当たっての基金の支援の実効性を確保することとともに、執行機関や実施企業の実務面も含む効率性にも配慮しつつということで、その上で、今回求めるべき点として2つ書いておりますが、商材の社会実装・海外展開に向けた自社の事業戦略上の標準化活動の位置づけについて、これをきちんと申請に当たって明確かつ具体的に記載

されていることが必要ではないかとしています。もう1点が、その標準化活動支援に係る申請に当たっては、商材の社会実装・海外展開に向けて、まさに事業戦略に位置づけられた標準化活動の内容が明確で具体的に記載されると。こういったことは基本的な考え方として確認する必要があるのではないかと、としています。

続いて13ページ、最後に「3. その他」の視点ということで書いておりますが、これは大所高所の観点も含めまして、本基金事業の成果最大化に向けて、標準化活動支援に当たってどういったことに留意すべきか、であったり、民間企業に求められること、また、国、総務省やNICTとして対応する必要があることとすとか、また、その他考慮すべきことがあるか、といったことを論点として挙げております。

最後に補足としまして、参考資料4-2をつけております。先ほど来、戦略プログラムをこれまで採択プロセスで評価・選定を受けてきたという点を申し上げてまいりましたが、その際の実際の提案書様式がどうなっているかの御参考として、NICTが公募のときに公表しているものをつけております。構成員の皆様におかれましては、まさに評価委員として内容は何度も御覧いただいた内容でございますけれども、例えばこの資料の7ページに知財・標準化戦略に関する記載項目があったり、また、全体としては、経営面、事業面、それから様々な商材の展開といった観点で、様式でこういった内容で記載をさせていただいて採択プロセスをいただいているということですので、この辺りの実務的なイメージも含めて御参考にしていただければと思います。

事務局の説明は以上でございます。

○森川主任　ありがとうございます。意見交換は、最後にまとめてとさせていただきます。

それでは、杉浦さん、お願いできますか。

○杉浦構成員　森川先生、どうもおはようございます。

○森川主任　おはようございます。

○杉浦構成員　それでは、私のほうから、標準化活動と、各企業様の中で標準化に向けて進めていただいているところの組織運営というか企業戦略について、基本的な考え方、こうしていったらいいのではないかとというようなことを、少し意見を提示させていただきたいと思っております。

すみません、次のページをめくっていただいてもよろしいでしょうか。

ここ、新たな通信システムとか技術、今回のBeyond 5Gの市場獲得に向けた活動ということなんですけれども、そもそも今回のプログラム、今標準化戦略室長のほうか

らもお話がありました、社会実装・海外展開プログラムということだと思いますけれども、この社会実装・海外展開というのは、すなわち海外で市場を獲得する、海外のお客様に製品、サービスが売れるということを目指しているということだと思います。海外のお客様からすると、当然標準化されている、標準にのっとったサービスとか製品というのは信頼できるということで重要な要素になると思うんですけども、皆さん、そういうこともありまして、各企業様においては、デファクト、デジュールの標準化団体で様々な国や企業の方々と技術的な標準案を作成するというので、大変ないろんな御苦労という作業をさせていただいていると思います。

せっかく大変な作業、いろんな打合せだとか会議や何かで標準案を作成されているということで、なるべく標準化活動というのを戦略的なツール、有効なツールとして使っていけないかということのアイデアを書かせていただいています。

これは現在見られる活動例ということで、全ての企業様とかが必ずこうだというわけでもないですし、標準化団体の内容ですとか、あるいは開発している技術内容によってこれは異なってくると思うんですけども、例えば大ざっぱに言うと、各企業様の中だと、営業と技術開発、それから標準化を活動されている方々というのがこういう方々が担当としていらっちゃって、ある程度情報共有をしながら営業活動をしたり、標準化活動をしたり、技術開発をしているというようなことだと思います。当然、営業の方々というのは、ふだん日頃から、市場、すなわちお客様と接していろいろ要望を聞いたりですとか、どういうシステムに御関心があるのかという情報収集はしているんですけども、場合によっては、各組織が情報共有ということでの連携はしつつも、それぞれ各本部独自に計画を立てて活動されているといったようなケースも見られるんじゃないかなというふうに思っております。

次のページをお願いします。

ここをどういうふうに戦略的に変えていくかということのアイデアで、むしろこういった要素を既に取り組みされている会社様も多いと思いますし、ひょっとしたら、まだこういうところが十分行き届いていないなというような企業様もいらっしゃるかなと思うんですけども、まず、やはり今回のプログラムに限らず、企業活動としての出口というのは、いかに市場を獲得できるか。もう少しありていに言ってしまうと、お客様の契約が取れるかということで、ここに必ずターゲット、目的関数を置いた営業とか技術開発、標準化みたいな活動が推進されるべきなのかなというふうに思います。

そういうためには、市場とかお客様の情報とかニーズみたいなもの、こういったものをベースにした、営業とか技術開発、標準化みたいな全ての活動を束ねて戦略的に指示を出す司令塔みたいな方がいらっしやって、具体的な指示を出していくような役割がこれから必要になってくるのかなというふうに思います。技術開発担当の方にしてみると、お客様のニーズはいろいろ変わりますし、お客様によってまたいろんな細かいニーズの変更があると思うので、こういったお客様のニーズを取り入れた技術開発をやって、開発計画やなんかも柔軟に変更できるような柔軟性を持たせるようなことも出てくるかと思えますし、標準化団体の活動に参加されている標準化担当の方、当然国際標準の会議やなんかに年間複数回出て、いろんな標準案の作業ですとかそういったことに時間を割かれていると思うんですけれども、営業情報や何かを基にして、なるべく自社の優位性が高まるような標準案の提案だとかコメントを出していただくかというような能動的な活動、こういったことで、なるべく自社に有利にしていくような戦略的な活動が必要かなということ、少し概念図を次のページに書かせていただきました。

この図はあくまで概念図ですので、必ずこのとおりのことではないかもしれないんですけれども、一番ターゲットとなってくるのは、一番右側の市場とか顧客、お客様です。営業の方々、この方々の情報を常に入手している。このお客様方の細かいニーズというのを営業の方がつり上げて、この司令塔になる方、仮にここで市場戦略ディレクターという名前をつけていますけれども、このディレクションをするような方というのを1つ司令塔を置いて、お客様のニーズや競合の動きというのを入手して、分析して、勝てる市場戦略というのをつくっていかなくちゃいけないと。勝てる市場戦略をつくった上で、技術開発分野に活動目標を提示したりとか、標準化活動の方々に活動目標を提示するということで、標準化活動をやっている方々も国際標準の作成作業というような形でももちろん従事していただいているんですけれども、新たな標準案の提案だとかコメントというところで、少し自社の売り込みに寄与するような能動的な提案をしていくというようなところが必要かなと思います。

言い方を変えると、市場獲得を目標点において、技術開発、標準化活動をバックキャストしてきてアクション案を立てるというような、こういう全体構造が必要かなと思います。また、これは副次的な効果かなと思うんですけれども、いろんな標準化活動に参加されている方々の話を聞くと、かなり多くのコンペティターの方ですとか、競合するような企業の方、それから将来的に潜在的にお客様になりそうな潜在顧客の方々が標準化活動

の場に参加していらっしゃいます。こういった方々の発言とか、あるいは標準化会議の前後のフリートークの場ですとか、あるいは会合の場みたいところで、お客様とか、コンペティターとなる他社のベンダーなどの情報収集とか動向分析の一端になるような情報を入手する、この標準化活動というのは、そういう意味でも、戦略的に情報を入手する非常にいい機会なのかなというふうに思いますので、こういった情報も積極的に入手して、上部の市場戦略を立てている司令塔に上げていただくというような活動をしていくことで、戦略的、能動的な組織運営ができるのかなというふうに考えております。

最後のページに、ちょっとまとめを書かせていただいています。

組織運営のポイントということで、今説明したようなことを言葉にしているだけなんですけれども、1つは能動的な活動指示を出せるような司令塔、ここでは市場戦略ディレクターという言葉をしていますけれども、この司令塔を組織内に置くということ。

それから、営業の方を中心にとということだと思んですけども、市場とかお客様のニーズ、あるいは競合の情報みたいなのを細かく即時入手できるような営業担当を置く。場合によっては、これは標準化の活動されている方々も、国際標準の場でいろんな情報を吸い上げることもできるかなと思います。

それから、標準化担当の方々です。技術開発担当者、あるいは標準化担当者というのは、全体の市場戦略ディレクターの指示、あるいはここと情報交換して一緒に考えるようなことで能動的な活動をしていくということが、やっぱり市場獲得の上では非常に大きい標準化をツールにしていく手段かなというふうに思っております。

総じて言いますと、標準化活動は非常に大事な活動なんですけれども、標準化活動の標準案作成というところで、どれだけ充実した活動をしているかというよりは、標準化活動されている方に、一体どういう期待をしてどういう指示を出すのかというような、その会社全体としての司令塔の存在ですとか、全体の組織の有機的な運営ですとか、そちらのほうをしっかりと充実したものにして、国際標準活動のできた成果をより有効なものにしていくというような、周辺といいますか、標準化活動を支える部分の方々の組織が非常に大事かなというふうに考えておりますので、皆様のちょっと御議論の一助になればと思います。

以上です。

○森川主任　杉浦さん、ありがとうございます。

それでは、続きまして、木村さん、お願いできますか。

○木村構成員 森川先生、ありがとうございます。

それでは、ポストコンサルティングの木村でございます。まず、本日は、貴重な機会いただきまして、ありがとうございます。

私からは、標準化戦略を考えるフレームワーク及び本WGにおける課題感というところにつきまして、数枚でのプレゼンテーションをさせていただきたいと思っております。

今御覧いただいている1ページ目、これはBCGとして考える標準化戦略を考える上でのフレームワークです。ポイントは、Why、What、How、Whoの4つ全て連鎖していく中で初めて成果が出るという問題意識でございまして、ここまでの本WGでの議論と、結果的には平仄が合っているという形になると思っております。日本企業の置かれている状況としてWhyの部分、イノベーションを通じた市場創造というものが企業価値向上に必須になっているという中で、特に次のWhatの部分、競争のベースが従来の製品単位のものから、後ほどのプレゼンテーションでも入っていたキーワードですが、エコシステムに拡大する傾向があるというふうに理解しています。そういう意味でも、ルールとか標準というものの考え方というものが、いわゆる単純な技術的な知財というものから、より上位層の概念というものまで含めて入ってきていると理解しております。

従いまして、今ある市場の中でどう適用していくかという市場戦略、これは当然、事業として勝つために必要だという認識なんですけれども、それと同様もしくはそれ以上に、市場自体の設計というものを意図したルール形成、これを標準化戦略でやっていくというのが鍵になると。もともとこういう問題意識で本WGが運営されているというふうには理解しています。

今回の取組で議論しているように、ルール形成戦略というのを追求する上では、全体となるビジネス戦略が非常に重要になっていく。基本的には競争戦略というものは個別の企業単位で策定されるものでありながら、標準化ということになりますと、個別企業レベルにとどまらず、業界もしくは国というレベルでの全体のオーケストレーションも市場創造に必要になります。従って、なるべく個々の企業、個々の案件というものを審査するという本WGの位置づけではありながら、日本としてどういう方向にエコシステムを持っていきたいのかというところのイメージを持って議論ができると生産的になるというイメージを持っております。

一番右のWhoのところです。この場合、当然ながら政府の旗振り及び後押しの重要性というのは従来以上に増していると認識しております。繰り返しになりますけれども、理

由1つ目は、市場創造においては個社を超えたベクトル合わせが必要になるということ。もう一つは、中長期の取組になりがちな標準化の活動は、単年度収支を追いかける事業会社では、場合によっては対応の優先度が下がるリスクもあるということです。ただ、中長期勝つためにはそこが一番重要ということですので、その後押しというものが非常に重要になるという問題意識です。委員の皆様におかれましては、目新しい話ではないとは思いますが。

次のスライド、先ほど申し上げました標準化戦略の本質的課題が、ルール形成戦略の前提となるビジネス戦略にあるということを事例で説明したのになっております。具体的には、緑色の箱の中にサーキュラーエコノミーという取組における、フランスの企業、ベオリアの事例を入れさせていただいています。ポイントは、川中と書かれていますルール形成というところの上下段、上位としての戦略の策定という部分、それから川下のところでの事業展開という部分です。これは当たり前ではあるんですけども、ルール形成における戦略、ルール形成における普及というものが必要なように、その横にある事業戦略、競争戦略、それから事業展開というものがセットになって初めて価値を生むということです。今回の議論も、右側の話だけではなく、左側のビジネス戦略との関係性を、これまでの議論との整合も含めながら確認できると非常に意味があると考えています。

最後の1枚、最終的にはこういった取組を価値創造、つまり、お金に変えていかないといけないということです。どこで稼ぐのかということにつきましては、ここで4つぐらいパターンを幅出ししています。具体的には、個別企業様の戦略に応じて、どこで稼ぐのかというのは異なってくるというふうに思っていますが、これまで議論をさせていただきました案件をベースに考えますと、2つ目のオープン・クローズ戦略のところ非常に鍵になってくるのかなという印象を持っているところでございます。オープンに仲間づくりをグローバルに広げるということと、そのエコシステムの中で自社固有の優位性を保つということ、ここのバランスを両立させないといけないということです。今回のWGの議論を通じて、より深い議論が起きるとするのは非常に意味があると思います。そういった議論を後押しして、もう一段、深い形での取組ということが出来る形になればいいと思っています。

私からは以上です。

○森川主任 木村さん、ありがとうございます。

それでは、立本先生、お願いできますか。

○立本構成員　　ありがとうございます。森川先生、ありがとうございます。筑波大学ビジネスサイエンス系の立本と申します。本日はお時間いただきましてありがとうございます。

お二人のプレゼンテーションの後に私もプレゼンテーションをさせていただきたいと思います。

タイトルは、標準型とエコシステムづくりの重要性というタイトルで、プレゼンテーションを短くさせていただければと思います。お願いします。

次のスライドをお願いします。

このスライドは、標準化活動とエコシステムづくりの重要性について1枚で書いたものです。我々は、技術開発のところを少し今支援しているわけですが、その技術開発は最終的には製品／サービスになって社会実装されます。ということなんですけれども、こういう例えば通信とか、あと最近でいえばソフトウェアとかシステムのものの場合、エコシステムづくりが重要ですよと言われてます。それはなぜかという、結局技術、製品／サービスが単体で使われるというよりは、もっと広い技術体系とか技術世代とか、あとは組み合わせて使うとか、あとはもっと大きい意味で例えばまちづくりとか、自動運転とか、エンタメとか、その中でどういうふうに使われるかみたいな、全体の中でどうかという、そういう非常に重要な視点が最近重要視されていると思います。特に今回対象としているBeyond 5Gみたいなものも、ビジョンとかアプリケーションを基にしたときにどうなんだと。一つ一つを見たらどうなんだということが非常に重要になると思います。ですから、技術開発というものとエコシステムづくりというのは非常に重要ですよ。ここをつなぐものとして標準化活動と、特にグローバルマーケットで言えば国際標準化活動があります。標準規格になることによって広く使われると。広いプレーヤーに対してアクセスできるような技術になりますし、コンシューマーにとっても採用しやすいと。各国にとっても採用しやすいというものになります。ただ、この標準化活動、非常に従来であればデジュリ標準が非常にあれだったと思いますけれども、アプリケーションが高度化していくことによって、特にインターネットに近いものになってくることによって、デファクトとか、あとはコンソーシアムとか、非常に複雑化しておいて、この人員とか、あとは戦略との関係性が非常に重要になっているということが重要になっています。

このスライドをまとめて言うと、要はその技術開発をやるときには、エコシステム、非

常に重要なんだけど、そこをつなぐものとして標準化活動が昨今重要になっておるんですけども、なかなかその手が足りていないのでここを支援する必要があるだろうということをお願いいたします。

次のスライドをお願いします。

先ほど言ったエコシステムなんですけれども、我々が主に念頭にしているのはネットワークのところでしたけれども、この赤い印で書いてあるところです。しかしながら、先ほども、スライドも1つあったと御紹介したとおり、ネットワークの1つのレイヤー、1つの層だけで終わるものではなくて最近ではなくなってきておって、当然、これは従来からもあったような端末とかデバイスとかというのは従来からもありましたけども、あります。一方で、さらにそのネットワークやデバイス端末から生まれてくるようなデータをどうするんだとか、あとは認証をどうするんだとか、あとは最終的にはサービスの体系がないと、フレームワークがないと、結局そういうデータの持ち方とかそういうものもよく分からないとか、そういう話が出てくると思います。その意味でいうと、この図で書いたように、ネットワーク、主な事業者としてはネットワークが考えられますけれども、エコシステムとしては、その上、例えばコンテンツとかデータとか、もしくはその下のようなデバイスとかシステムとかシステム機器とか、そういうもの全体を含めたようなエコシステムの俯瞰的な視点が必要で、これを基にしながら活動する必要があるというふうに考えています。

次のスライドをお願いします。

これは私の用意してきたスライドの最後のスライドですけれども、結局そういうときにはどう考えるの、どういうふうな活動の指針になるのかということを書いたのが、組織としてどう活動の指針になるのかというふうに御参考になればと思って作成したのがこのスライドになります。

標準化活動というと、標準の規格のドラフティングとか、あとは標準会議のディスカッションとか、そこだけがクローズアップされることが多いような気がしますけれども、それは大きく間違いでして、間違いでしてというのは、標準化活動に出席されている方も、それだとなかなか自分の活動としては困るなというところが多いと思うんです。それはなぜかという、先ほどのスライド1枚目、スライド2枚目から申し上げているのは、結局標準化活動というのは、その先に事業戦略とか事業があります。自社としては事業をうまく生かせるため、ただ、それだけだとできないのでエコシステム全体をやらなくちゃ

いけない。そうすると、要は標準化活動というのは、昔からの言葉で言えば、例えば仲間づくりとか、あとはエコシステム的な観点で仲間づくりするとか、あとは自分の会社の利益を取りながら、かつマーケットをつくるという意味ではオープン・クローズ戦略とか、そういうことになると思うんです。そうすると、従来言っていた標準化活動についてはドラフティングするとか、そういうことにのみならず、左下の図で丸と四角で描いた図のように、標準化活動と研究開発と事業戦略が三位一体で関係してしまうと。その中の一つ一つの要素として、アーキテクチャーどうするんだとか、標準化活動の中でアーキテクチャーどうするんだとか、どこが標準化、スコープになるんだとか、テーマ設定とか、あとは研究開発ですと知財どうするんだとか、あとは自分で開発するのか協力会社をお願いするのかとか、make/buyの話があると思います。特に重要なのは、結局最終的に事業戦略としてどうするんだと。どこでもうけるんだとか、あとは自分だけじゃないときにどうアライアンス取っていくんだというような、アライアンスの戦略とかビジネスモデルと非常に密接に関係しますと。私が挙げただけでも、標準化活動とか研究開発とか製品開発とか販売とかを入れた事業の3つの視点があるんですけど、これを統合的にまとめるのは非常に難しいんです。難しく、標準化の中だけでやってくださいと言われても、なかなかバランス取ることはできない、統一的な見解することはできないと。普通、そういうときに、1つ上のレイヤーで、1つ上のレイヤーというのはトップマネジメントのレイヤーでやっていかないとなかなか難しだろうと。これがなぜトップマネジメントのレイヤーでやっていかないと難しいかという、エコシステムの形成とか仲間づくりの太い矢印で書いたように、結局社外のステークホルダーに対して発信していかなくちゃいけないんですよね。先ほどの1枚目のスライドでお見せしたようにビジョンを発信したりとか、あとは、ビジョンを発信するだけだと絵に描いたもちだと言われるので、大体の場合、成功例をどうするんだと。1番目の成功例をどうするんだと。そのときに誰と一緒にやるんだとか、そういう非常に難しい話がいっぱい出てくると思うんです。特にマーケットの形成とかを考えたときには、やったことない、例えばまちづくりをやらなくちゃいけないとか、国防をやらなくちゃいけないとか、いろいろ出てくると、どういうふうなモデルづくりがいいのかとかというのは非常に難しい話になってくると思います。場合によっては、多分赤字になるときがあると思うんです。短期的には赤字で、長期的には黒字になっていくと、そういうモデルもあると思います。

そういう長期的なモデルの場合は、特にトップマネジメントがサポートしていくとか、

トップマネジメントがこのバランスを取っていくとかいうような御前会議の場がないと、なかなか難しいと思われるんです。ほとんどの会社は、御前会議みたいなものの重要性を標準化活動されている方にお伺いすると、これ、もう絶対必要だと言うんだけど、そういう体制取れていないと思うんです。それは、従来からの標準化活動でいえば標準企画をつくることだ、ドラフティングだというふうに、そういう頭があるので、なかなかそういう御前会議のところになっていないと思うんですけど、特に事業戦略とくつつくんだとか、研究開発戦略とくつつくんだという話であれば、多分こういう御前会議みたいなものが必要であろうというふうに思います。

ですので、ちょっとこの最後のスライドのまとめをすると、特に標準化活動するときにはトップの関与が非常に組織体制として重要だと思います。この中身何やっているかは、今お二方の先生に御示唆いただいたと思うんですけど、私からとしては、私のメッセージとしては、特にトップがこのような活動に関与していかないと、もしくはサポートしていかないと、もしくはトップにレポートラインがないとなかなか難しかろうというふうに思っています。

私の発表は以上で終わりです。ありがとうございます。

○森川主任　ありがとうございます、立本先生。

それでは、意見交換に入りたいと思いますが、資料の4-1、影井さんから初め御紹介いただいたこちら、御議論いただきたい視点①と②と③というのがありますので、それぞれ御意見いただければと思います。まずは、今、画面共有いただいていますけれども、①の対象決定等に係るプロセスの在り方になりますが、検討の視点というのを挙げていただいておりますけれども、こちらはいかがですか。何かお気づきの点等ございますか。お願いします、木村さん。

○木村構成員　ポストンコンサルティングの木村でございます。

先ほど申し上げましたとおり、今回、事業の戦略とルール形成というものを両輪として考えるということに意義があるという立ち位置に立っております。そういう観点で、既に世界へのグローバルな展開ということを意図し、事業戦略も含めた議論を行っている案件をベースに進めることにつきましては、本来の姿により近いというふうに私自身は感じています。ここにあるように、透明性、客観性というものは当然ながら前提とした上で、ディスカッションが一定なされている事業を出発点とするということにつきましては、私はこの方向で違和感がないというふうに考えております。

以上です。

○森川主任　ありがとうございます。ほかの皆様方、いかがですか。人数が少ないのでそれぞれコメントを……。

○杉浦構成員　すみません、杉浦ですけれども、よろしいでしょうか。

○森川主任　それでは、杉浦さん、お願いいたします。

○杉浦構成員　基本的に、今の木村委員の意見と同じでございまして、既に戦略プログラムの採択で、市場面だとか市場戦略や全体像について審査されていますので、1から公募評価採択を行うんじゃなくて、研究開発採択書の提案内容を踏まえて、さらにそのところで標準化の部分の審査をしていくというプロセスで適当だと思います。

また、標準化活動自体の内容について、先ほどいろんな、立本先生ですとか木村先生からも話が出ていると思うんですけれども、そういったような皆様からのアイデア、結構具体的に出ている部分もありますので、そこで総務省さんのほうで、この要件や何かを具体的に決めて審査をしていただくということでもよろしいんじゃないかなというふうに思いました。

○森川主任　杉浦さん、ありがとうございます。ほかいかが、立本先生、お願いします。

○立本構成員　森川先生、ありがとうございます。

今、杉浦さん、木村さん、御意見していただいたと思うんですけど、私も同意見でして、1からではなくて、既にあるものをさらに、特に標準化もしくはエコシステムをつくるどうか、あと社会実装の意味でここは非常に重要だという、強化するという意味で非常に重要であるという観点から、今まで出てきた案件は市場性のところはもう見ているわけですが、特に標準化のところとか国際標準化のところとか、あとはそこと事業戦略がどう一体的に運用されるのかということも明確にしながら評価できればというふうに考えています。お二人の意見に賛成です。

以上です。

○森川主任　立本先生、ありがとうございます。平田先生、お願いします。

○平田構成員　皆様からもう十分御意見が出ているので、私も異論はございません。特に、これまで個社では取り組みづらかった標準化、どうしても取組が優先されてこなかった標準化をどのように戦略的に取り組むように支援していくかといったところで、今回の行政の支援の在り方は非常に画期的であり、適切であると思います。特にこの①の論点のプロセスをお考えになったということは、もちろん背景には、効率をよくいかにスピーデ

ィーに我が国の標準化のエコシステムを立ち上げていくかという、ファーストステップとして非常に適切で合理的だと存じます。

ありがとうございます。

○森川主任 平田先生、ありがとうございます。皆様方から、こちらに記されているような方向感でいいのではないかというコメントいただきました。確かに効率的なプロセスだというふうに思っておりますので、私もよろしいかというふうに思いました。

それでは、こちらはよろしいですか。

○影井標準化戦略室長 森川先生、ありがとうございます。事務局からよろしいでしょうか。

○森川主任 もちろんです。

○影井標準化戦略室長 1点目の論点について、ありがとうございます。また、その前段での3人の構成員皆様からのプレゼンも含めまして、改めて事務局としても認識を深めまして、事務局資料では実効性、効率性という言葉を使っていますけども、何より重要なのが、開発から標準化、社会実装までの一体性ですとか、この標準化支援を単体で固有で考えるということではなくて、一体性やエコシステムということが非常に大事なのかなと思ひまして、まず、その視点をきちんと我々としてテイクノートしていきたいと思っておりますし、もともとこの戦略プログラムを立ち上げたときの1年前の議論も、総務省としてかなり大きな新しいスキームを入れてきたわけで、様々なプロセスを経て今回プレーヤーが決まってきたと。やはりそこは日本として、海外に向けて積極的に、ある種社運をかけて頑張るといふ企業さんを応援する、支援するというのが、まず大前提の大きな方針だと思いますので、個々にマイクロマネジメントとか重層的な評価をするということが目的ということではなくて、いかに成果につながるための最短距離を走っていただくかという観点で一番ふさわしい最適なやり方というものを取っていったらという考え方でございますので、1点目について今日御議論いただいた内容で方向性が非常に合っていると思ひますので、ぜひそのように整理していきたいと思ひます。

1点だけ補足をさせていただきたいのが、今回、このタイミングで標準化の支援をこれからやっていくという上では、戦略プログラムについては既にこの1年で採択を終えていると。研究開発単体では採択を終えていて、その追加支援的な標準化支援ということになりますので、そこを組み合わせるような議論だったんですけども、今後、また戦略プログラムの研究開発を新規に採択していくケースというのが、今後考えられると思ひます。そういったケースになりますと、そこは今の考え方で申しますと、最初から標準化支援の

関係も含めて、ある種一体で選定していくプロセスというのもあるのかなと思ひまして、今日の事務局からの問題提起が、研究開発の始まりと標準化支援とずれがございますので、この段における今の当面の枠組みとしてはこういった方向性となりますが、今後を見据えると、そういった考え方もあるかなというところは少し提起をさせていただき、補足をさせていただきます。

○森川主任 影井さん、ありがとうございます。それは、今後はもちろんそういうのは十分あり得るといふふうに僕も思います。ありがとうございます。

それでは、次に②です。こちら、審査の要件の在り方、申請いただく内容が満たすべき要件みたいな形になりますが、こちらに関して、また皆様方から御意見いただければと思います。関連するものとして、今日、杉浦さん、木村さん、立本先生からも話題提供をいただきましたけれども、それらも踏まえていただいても構いませんので、こちらに関して、御意見あるいは補足等々ございますか。いかがでしょうか。

○杉浦構成員 森川先生、杉浦ですけれども、よろしいでしょうか。

○森川主任 お願いします。

○杉浦構成員 木村先生ですとか立本先生からお話があったもので、私もほぼ同じような考えで、今回、意見提示をさせていただいたんですけれども、1つは、国際標準の取組自体を、ここに書いていただいているとおり、標準化団体、どこでやるのかとか、どういう計画でやるのかというところを具体的に書いていただくというのは、これは大前提だとは思いますが、一方で、こういう活動というのは既に各多くの企業の方がかなり熱心に取り組んでいらっしゃるって、標準化団体、国際の場でも御活躍はされていると思います。

そういう意味で、どちらかという、立本先生の最後のプレゼンテーションなんかもすごく大事な視点を御指摘いただいているかなというふうに思うんですけれども、標準化活動そのものの部分だけではなくて、標準化活動を含め、企業全体のエコシステムづくりのためのトップマネジメントのリーダーシップ、あるいは、ここで戦略を練る御前会議というふうに書かれていますけれど、多分、これ、ほぼ私と同じことを言っているんだと思うんですけど、私の場合は、ここに司令塔的な役割の人を置いたほうがいいんじゃないかというような意味合いで言うと、そこに相当するものだと思うんですけど、こういった社内の体制、あるいは他部署との関係だったりとか、これがどのくらい有益的に接続されて全体として組織を運営されているかという、標準化活動そのものの担当者の活動の計画

だけではなくて、全体含めた、会社全体としての標準化活動をどう使っていくのかという戦略、この辺りをぜひ要件にさせていただくと、非常に市場をつくるというような目的の最短経路というのに近づくのかなというふうに感じました。

以上です。

○森川主任 杉浦さん、ありがとうございます。平田先生、ありがとうございます。お願いいたします。

○平田構成員 本日の話題提供、3件とも、標準化をビジネスの主軸の1つとして捉えて、経営と一体化させてという体制づくりや計画の立て方について示唆があったと思います。それについて全く賛同しております。

一方で、それを支援する行政の支援としてなんですけれども、個社それぞれの中で体制を、リーダーを置くとか部門を設けるとか体制を整えるということは、個社の中ではできるんですけれども、その個社同士が日本として標準の方向性を一致させ、その後に世界の標準をリードするというふうには、かなり時間もかかると思いますので、一旦その体制を置くだけではなくて、中長期を見据えた人材の開発ですとか人材開発の支援といったものも、非常に重要になってくるのではないかと存じます。

その点について、恐らく今回の行政の取組のプロセスの中でも、個社に対しての教育ということではありませんが、情報提供や示唆をする、このような機会を増やしていく、強化していくということが非常に両輪となって重要になっていくのではないかと、短い視点と長い視点の標準化の人材育成や開発ということも重要なのではないかとこのことを考えました。

以上です。

○森川主任 平田先生、ありがとうございます。じゃ、木村さん、お願いいたします。ありがとうございます。

○木村構成員 ありがとうございます。

今回、皆さんと同じようなことを発言することになると思います。プレゼンテーションやこれまでの議論の延長にはなりますが、今までの審査の中でもいわゆる技術レイヤーの活動というものを中心に結構議論されていた部分が多いと感じています。今回は、少し構えを広く取って、産業構造でありますとか、新しく本当に需要をつくっていくとか、エコシステムというソフトなものというのを構築していく営みというところにつきまして、いわゆる狭義の標準化ということではないところをしっかりとカバーすることがで

できればよいと思います。ただし、前提として、事業戦略との関係性というものが明確に述べられているということはもちろん必要になると思うんですけども、今の競争環境とこのをベースにするとそういう形の支援にさせていただくのが、最も意味があるんじゃないかなに感じております。

○森川主任 木村さん、ありがとうございます。立本先生、お願いいたします。

○立本構成員 筑波大学の立本です。森川先生、ありがとうございます。

私、2点ありまして、1点目は、今杉浦さんとか木村さんとかおっしゃっていただいたやつとすごく近くて、標準化それ自体というよりは、事業戦略と結びついたときとか、そういうエコシステムと形成とか、そういう意味、技術世代をつくっていく、技術のジェネレーションをつくっていくとか、そういう意味でいったときに、それ以外の標準規格をつくるというだけ以上の活動が組織の中では必要だったりとかすると思いますので、その取組にされているところに対して強化拡充が必要であろうと、社会実装のために必要であろうと。特に国際標準化の場合はコストは大きいですから、その辺も重要だろうとか、非常に思いますので、そこはサポートの対象でいいんじゃないかと思っています。

2点目は、平田先生おっしゃっていただいたような、ちょっとどういうふうにやったらいいのか分からないんですけど、人材の育成的なところは、多分このような1点目の活動をする中で必ず必要になってしまうのではないかと思われて、そこはちょっと強弱とか、あとは、どういうふうにとかというのはあるんですけども、やっぱりキーワードとしてあるかなというふうに思っています。

以上です。

○森川主任 立本先生、ありがとうございます。何か皆様方から追加等ございますか。

杉浦さん、木村さん、立本さんから、今日話題提供をいただきましたとおり、事業戦略の中での標準化ということになりますので、ぜひこの機会に提案いただける方は、当たり前のことなんですけど、改めてしっかりと考えていただければ、私としてもうれしいかなというふうに思っております。

これ、もちろん正解はないものなんですけど、この機会にあらためてしっかり考えていただいて、考える中で、例えば国際標準を獲得するためには、どういった人たちと協力すればいいのかとか、あるいはどういった人たちが競合になるのかとかいったことも、もちろん視野に入れながら考えていくということになりますので、ぜひ、このような、せつかく総務省が最大1億円でしたっけ、1億円ありますので、ぜひこれを機会に、経営陣にも関

与いただいて、改めて考えていただければ、それは何かしら次につながっていくのかなというふうに、私自身も皆様の御発言等を伺いながら思いました。

それでは、こちらはよろしいですか。

○影井標準化戦略室長 森川先生。

○森川主任 どうぞ、お願いします。影井さんですか。

○影井標準化戦略室長 事務局でございます。ありがとうございます。

検討項目2つ目に関しましては、構成員の皆様のプレゼン内容も踏まえまして、非常に明確な大きな部分としましては、やはり事業戦略とのコミット、事業戦略やビジネスプロセスとの一体性というものは、これは共通した方向感かなということと、あとやはり全ての構成員皆様から、司令塔機能ですとかトップの関与、トップマネジメントということで、御前会議といった場のお話もありましたが、各社、個社の中での様々な本件に関する取組もきちんと経営層の関与が必要ですか、ここはやはり基金事業の運用ともシンクロした大きな方向性のコンセンサスかなというふうには思っております。

また、御議論の中で人材関係のお話も、平田先生、それから立本先生からも出てまいりましたけども、今日の議論の論点の1と2は、どちらかという基金による支援方法のHowの部分になりますので、どちらかという3のその他の方になるかもしれませんが、例えば事務局の12ページの2点目に、今回の支援対象というのは、必ずしも各企業さんが採択プロセスときに記載された内容そのものということではなく、きちんと解像度を上げて拡充するもの。もともとこの戦略プログラムの中で、あるいは民間企業独自でやろうとしていた標準化活動の取組を、さらに拡充・強化するものとしています。具体的には、標準化活動もこういった団体のこういった会合、あるいはその周辺の活動に対して、より広げていこうという拡充の動きですとか、また、人を派遣するに当たっても、もともとはこの人1人で行くつもりだったのを、もう少し支援があることによって、例えば若い人も含めて人員を拡充してといった、様々なケースがあると思うんですけども、そういった事業を練り上げていただく中で、例えば企業の中でも、標準化活動へのプライオリティーですとか、そこへの人員や体制、リソースの配分みたいなところに、一定程度そこが底上げされるようであれば、少なくともそういった観点から人材育成にもつながるかなと。その上で、これは日本全体、あるいは業界横断で、人材とか様々な課題というのは、新経営戦略センターといった別の場でも、次世代リーダーの研修活動など様々な営みがありますので、標準化人材については政策的に行政として引き続き重要な課題だと思っております。

して、この基金そのものというよりは、また別の側面になるかもしれませんが、政策としては全体で、パッケージで対応していきたいと思っていますところでは。

検討項目2に関しては、今日の御議論を踏まえて、支援要件の在り方について事務局の方で次回に向けて解像度を上げて整理していきたいと思っております。ありがとうございます。

○森川主任 影井さん、ありがとうございます。

それでは、こちらはよろしいですか、先生方。ありがとうございます。

それでは、③です。そのほかという感じですが、全般、幅広く前広に何か考慮すべき点等あるかどうかということです。これはいかがですか。本基金事業の成果最大化に向け、どのようなことに留意すべきか。総務省、NICTに求められること、民間事業に求められること。そのほか考慮すべきことはあるかということです。いかがですか。木村さんから、まず、お願いできますか。ありがとうございます。

○木村構成員 森川先生、ありがとうございます。

これまでの基金の議論と同じで、今回の標準化活動も、市場を定めて知財を出せばいいという話ではない活動も含まれるものだとすると、全てが考えたようにうまくいくということではなくて、ある意味、競争という文脈の中における標準化だというふうに理解しています。

ですので、そこも含めてではあるんですけども、今後のモニタリングをきちんとしていく中で、活動内容もしくは何らかの成果につながるような予兆があるようであれば、その辺りの情報というのも随時御提供いただくということが非常に大切になってくるかなと思います。

繰り返しになりますけれども、100%確実に成果が上がるというところじゃないところにチャレンジいただくためのサポートだというバランス感が必要だと思います。そういうバランス感の中できっちりモニタリングして、リターンというところを上げていくために、やり方も含めて我々としても工夫していかなければと感じております。

○森川主任 ありがとうございます。それでは、立本先生、お願いいたします。

○立本構成員 立本です。ありがとうございます。

今のおっしゃっていただいたことと、実は私も今、まさに同じことを考えていて、この取組は、事業戦略というか競争戦略の中とか、あとは仲間づくりの中のお話だと思いますので、自分だけで終わる話ではなかなかないと。言いたいのは、恐らく、結構な割合で軌道修正が必要とか、もし成功と失敗とか考えるのであれば、当初の計画どおりにいかない

という意味では、あんまり成功しないことが多いという、そういうタイプの取組だというふうには私どもも理解しています。

ですので、ある一定程度の失敗するというのは、そういうものなんだということで、今後モニタリングする際には、当初計画で書かれていたことが成功しているとか失敗しているとかというよりも、特にそういう取組をしているとか、つまり、一定程度失敗するというのはむしろ取組がきちんと行われているんだということだと思えます。要は、軌道修正というのは、するというのが多分この中で非常に重要だと思いますので、そういう大きい視点に立ってモニタリング等できればというふうに思っています。

以上です。

○森川主任 立本先生、ありがとうございます。平田先生もお願いいたします。

○平田構成員 ありがとうございます。

先ほど総務省様から、基金だけではなく多面的な支援を計画して実施していくという、非常に心強い発言がございました。私ももともと企業におりましたけれども、基金のほうばかり気になってしまうこともあるんですけども、それで、そこに注力するということだけでなく、先ほど申し上げましたけど、標準化を事業戦略の中に組み入れて実施していくというのは、本当に時間を要する検討とか知識や経験も重要になってくるので、個社の中だけではなく、日本の企業が一体となってエコシステムをつくっていくということを考えれば、例えばこのような場で積極的に情報を、企業から見ると収集することで、行政やNICTさんからすれば、例えば海外の事例や戦略のパターンなどの紹介ですとか情報発信、お互いに情報を発信し合って考え続けると。標準化に取り組み続けるという場があるということが大事なのではないかということに改めて思いました。

○森川主任 平田先生、ありがとうございます。そうすると、杉浦さんもお願いできますか。

○杉浦構成員 ありがとうございます。ほぼ皆様から御意見が出そろったところなので、特に私から付け加えてということはないんですけども、平田先生からお話が出た人材育成の部分、ここも非常に大事な事かなというふうに思っています。私、標準化については、標準案作成という技術的なところに意思を持って能動的にできるということが結構大事かなと思うんですけども、標準化団体のいわゆる調整の場とか会合の場は、英語の語学力のみならず、独特なスキルとかコミュニケーションスキルだったりとか、あるいは人間力に近いような、いわゆるその人の人間性とか、うまくやっていく

ような部分のスキルみたいなものというのも結構求められて、非常に限られた人しか今、そういったところで充実する人がなかなかいないという人材不足の部分も結構あるかなというふうに思いますので、そういった部分での意識というか、そういったものが少し反映できるような部分というのがあるといいかなというふうに思いました。

以上です。

○森川主任 ありがとうございます。ほか、何かございますか。

森川からも。皆様方が御指摘いただいたことを繰り返す形になるかもしれませんが、今回の基金事業というのは非常に新しい試みかなというふうに思っています、これはすばらしいというふうに思っています。とにかく、いろいろなことをやっぱり我々チャレンジしていかないとはいけません。基金事業は今回の1つの試みだと思いますが、今までの国のこういう研究開発の施策でやっぱり問題だなと思っていたのは、何か提案したときの成果目標を達成することが、100%達成するのが求められてしまっていて、そうすると、達成できる目標を書いて、100%達成しましたと行って、よくできましたということになっていましたというのが多分多かったということです。それはそれでいいのかもしれませんが、次につながらないというふうに思っていますので、ぜひ、今回の標準化とかもそうですけど、走りながら進んでいくと見えてくる世界も変わってくるかもしれなくて、そうだとしたら、そういうことに気づいたらそういうことをきちんと認識したということが実はすばらしく、やってみたら、やっぱりこれはちょっと駄目だよねというのに気づく場合も、多分、あろうかというふうに思いますが、それこそが成果なのかなというふうに思っています。そのため、国に対するお願いとしては、そういう当初の提案とは違ったような形になった場合も、それが気づいたということをぜひ成果にしていただければというふうに思っております。

それとともに、今回のような標準化に対する支援でいいなと思ったのは、従来は、標準化に対して寄書を何本出したかということが成果になっていたわけですが、そもそも標準化に寄書を出すというのは、その裏にWhyという目的があるはずなので、そこも、そういう数字だけで評価するのではなくて、何のためにこれをやるのかというところにもしっかりと踏み込んでいただいているのもいいなというふうに思っています。これも継続的に、いろんな研究開発プロジェクトが走っていると思いますけれども、寄書の数だけということに加えて、裏側の目的みたいなところ、Whyというそもそも論のところ、そこもぜひ重点化していくきっかけになっていただければというふうに思いました。

ありがとうございます。先生方から何か追加のコメント等ございますか。よろしいですか。

○影井標準化戦略室長　では、森川先生、事務局からよろしいでしょうか。

○森川主任　はい、影井さん、お願いいたします。

○影井標準化戦略室長　もう今森川先生にまとめていただいたそれに尽きるところでございますが、行政という言葉もありましたので、検討項目3については、先生方の御意見をしっかり受け止めさせていただいて、今回のWGの検討において、きちんと提言的に整理していければと思います。

研究開発支援自体が、昨年度から今回の基金によって大きな転換をしているという中で、標準化支援に関しても考え方を転換し大きく舵を切っていくというイメージをやはり持っております。本日御議論があったように、ある程度アジャイル性を持ってですとか、ある程度はやってみて、うまくいかなかったところはそれをしっかり認めて次に生かしていくですとか、そういった発想というのは、この標準化支援に関しても非常に重要になってくるとやはり思いますし、また、人材面の取組ですとか多面的な取組等々含めまして、政府や総務省としても標準化というものにしっかり光を当てて取り組んでいくというメッセージですとか、また、こういった標準化を支援する枠組みができたところですので、どうしても頑張る民間企業さんを応援する、一番成果が出る形になるように、きちんとコミットメントをもってやっていく企業さんを応援するという側面と、やはり国として、標準化にはデジュール的な公的な側面もあり、また、木村様からも個社に閉じない、ステークホルダーが共通的な中で、国の役割も大きくなっていくお話がございましたので、そういった行政的な役割というのもしっかり果たしていきながら、こういった方法がうまくいくのかということは模索しながら取り組んでいきたいと思えます。

本当に今日は貴重な御意見、充実した御議論をいただきまして、本当にありがとうございました。

○森川主任　影井さん、ありがとうございます。先ほどちょっと影井さんのお話をお伺いしながら、改めて先ほどの僕が言ったコメントをちょっと振り返っていたんですけど、こういう研究開発プロジェクトで評価するとき、当初設定した目標を達成できたかとかいうのがありますよね。あれも、そうすると提案する時点で小さくまとまっちゃうのも結構あるというか、確実にできるものしかやらないみたいな、提案してこないとかいうふうになっちゃうと思いますので、評価項目というか、当初設定した目標を達成できたかというのは、

ちょっと標準化だとそういうのはないのかもしれませんが、標準化以外のところかもしれないませんが、これもなくしたいなと個人的には改めて思いました。

○影井標準化戦略室長　ありがとうございます。

○森川主任　それでは、皆様方、追加で何かございますか。よろしいですか。それでは、ありがとうございます。

(2) その他

○森川主任　それでは、議題、その他、こちらに関しまして、今後の予定等について事務局から説明お願いできますか。

○石田課長補佐　事務局でございます。

　　次回のWGは、2月中下旬の開催を予定しております。詳細については、別途御連絡させていただきます。

　　以上でございます。

○森川主任　ありがとうございます。

　　本日の議事は以上となります。皆様方、何か全体を通してございましたら、お知らせいただけますか。よろしいでしょうか。ありがとうございます。

　　それでは、今日は皆様方、いらしていただいた方、参加いただいた方も、朝早くから本当にありがとうございます。

　　以上をもちまして、革新的情報通信技術プロジェクトのWGの第4回を閉会といたします。朝から本当にありがとうございました。これにて閉会といたします。ありがとうございます。